

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士）

金屋光彦

燃えあがるいのち 爆発

—いじめ考 その7—

1 世界の芸術家・岡本太郎氏へのインタビュー

「死という最もきびしい運命に直面した時こそ、いのちが燃えあがるのだ。ぼくらは、この瞬間瞬間の日常でこそ、そういう生き方をすべきなんだ。人生は爆発だっ！」

眼を大きく見開いた岡本太郎氏は、興奮気味にそう断言した。若者向け月刊誌の記者時代、南青山にある私邸（現・岡本太郎記念館）で取材中、心に響いた言葉である。

2 全員面接時での子どもたちの変容

今現在、日本の若い人の自殺が止まらない。2015年には中高生の自殺が過去最高になった。子どもたちもそれがわかっているのか、東京都内小中高で4年前から実施してきた全員面接の際、相談しやすい環境づくりの背景を尋ねると、「いじめや自殺が、多いから」と答える子どもたちが、今年はめっきり増えた。

いじめは仲間内で起こる。悪口、中傷など言葉の暴力で、人は死に至ることがある。前回触れた葛西りまささんも、2016年11月に自殺した新潟県立高校1年の男子も、心無い言語暴力の繰り返しによって、死に追いやられたケースだった。

「9月中旬から今に至る平日は、生き地獄のような毎日でした。（中略）、本当はもっと生きたかったけど、もう生きていける気がしません」（新潟県立高校1年生の遺書）

エスカレートしながら執拗に続くいじめ。自分より弱い者をいたぶることで、己の心をいやす卑劣で情けない加害者。一方、自尊感情をひどく傷つけられ、自分の価値さえ疑い始めた被害者は、「解決し楽になるには死ぬしかない」という視野狭窄へと追い込まれていく。

このような苦境の中で、岡本太郎氏が語るいのちの燃えあがりを体験した著名な指揮者がいる。

3 NHK交響楽団終身正指揮者
岩城宏之氏のいじめ体験

岩城氏は、父親の転勤で転校が多く、病弱だったこともあり、どこの学校でもいじめられてきたという。その彼が、小学4年生の時、卑劣ないじめに爆発した。

「いじめは毎日続いて、だんだん暴力の度合いがエスカレートしてきた。（中略）、ぼくを地べたのコンクリートの上に土下座させ、何かをあやまれという。〈何か〉はいつもいいがかりで、とにかくありとあらゆることをいじめっ子は思いつく。いつもあやまってばかりいたが、一人がぼくの頭の毛をつかんで、『こうするんだよ！』と地面のコンクリートに叩きつけた。とても痛かった。突

如、ぼくは爆発した。一瞬の狂気で何もわからなくなった。体の強いやつらを四、五人相手にしていることや、ぼくが病弱なこと、転校したてのこと、京都弁でいじめられていることなど、すべてのことを超越してしまった。ムチャムチャ腹が立ったのだ。いきなり立ち上がって、ぼくの額をコンクリートにたたきつけたやつの顔の真ん中を全力の拳で突いた。（中略）、ぼくの全力の手加減なしの拳を、まともに目と目の間に受けたそいつは、仰向けにひっくり返った。ぼくはその上に馬乗りになって、そいつの後頭部を何回もコンクリートにたたきつけた。そいつは気絶したようだった。周りの悪童どもは、か弱いぼくの突然の豹変にびっくりして、ただ茫然と見下ろしていた。…」（岩城宏之著「いじめの風景」）

これ以後、4、5人グループによるいじめは、ぴたりと止まったという。

「窮鼠猫を囓む」という諺がある。また「窮すれば通ず」ともいう。この岩城氏が示した心意気を、今の子どもたちにも、ぜひ持ってもらいたいと思う。

4 ほんものの自己愛とSOSを出す勇気を持つ

しかし、現実には、過酷ないじめにもじっと耐え、周囲の子どもたちも、同調圧力に屈し見て見ぬふりをしてしまうのが大部分である。では、どうすればいいのか！

「度が過ぎていて、もう我慢ならない」と岩城氏がそのスピリットを爆発で現わしたように、自らの苦痛を表明することが重要だ。自分の思いを表現することは、基本的人権でもある。何より、自分が自分の助けや味方にならないで、どうするのか！ である。

また、深刻ないじめを防ぐためには、ぼくたち大人が、本物の自己愛を身につける必要もある。なぜなら、自分を大切に扱って初めて、周囲の人も大切に扱うことができるからだ。いじめる子の多くも、粗末に扱われた過去を抱えている。また、声をあげられる子どもは自尊感情が高く、その親も高いことがわかっている。

未来に生きる子どもたちが自らのいのちを絶つ現象は、社会における最悪の兆候といえる。いじめは、どこの学校でもどの職場でも起こりうる関係の病である。

重要なのは、破綻を招く前の対処だ。まず勇気を持って声をあげる。また自力で解決できない場合は、病気の際医師に頼るように、専門家の力を借りることも大切だ。今年の全員面接でも、このことを子どもたちに一生懸命伝えている。